

門 良一指揮・モーツァルト室内管弦楽団による
モーツァルト交響曲全 74 曲連続演奏

- ・全曲連続演奏開始年月日：1980年10月7日
- ・同終了年月日：1986年11月29日
- ・期間：満6年2カ月
- ・演奏会回数：65回
- ・演奏会会場：全9カ所

全74曲演奏一覧表

ケル番号(改訂ケル番号)旧全集番号	調性	作曲年	演奏年月日	演奏順	演奏会場	備考	
16	第1番	変ホ	1764	1980.10.7	1	厚中	
Anh.220(16a)		イ短	1765	1985.7.11	56	シンフ	1982年発見 / 「オデンセ交響曲」 / 日本初演 / 偽作
17(Anh.C11.02)	第2番	変口	1765	1986.6.11	69	厚中	偽作
18(Anh.A51)	第3番	変ホ	1765	1986.2.11	66	シンフ	C.F.アーベルの作(Op.7-6)をモーツァルトが写譜・編曲したもの
19	第4番	ニ	1765	1980.11.7	2	労セ	
Anh.223(19a)		へ	1765	1981.10.13	14	京2	1980年発見 / 関西初演
22	第5番	変口	1765	1980.11.14	3	厚中	
Anh.221(45a)		ト	1766	1982.3.27	18	京信	「(旧)ランバッハ交響曲」
		ト	1766	1982.3.27	19	京信	「(新)ランバッハ交響曲」(父レオポルトの作)
76(42a)	第43番	へ	1767	1981.9.11	12	厚中	
43	第6番	へ	1767	1980.11.26	4	労セ	
45	第7番	ニ	1768	1981.1.21	5	京2	
Anh.214(45b)	第55番	変口	1768	1981.5.27	8	労セ	
51(46a)		ニ	1768	1982.4.16	20	厚中	K.45の改作 / 「偽りのばか娘」序曲
48	第8番	ニ	1768	1981.4.16	7	厚中	
100(62a)		ニ	1769	1986.4.30	67	エンゼ	セレナーデ(第1番)K.100の第1,6,7,8楽章
73	第9番	ハ	1769	1981.3.18	6	ピロ	

81(73l)	第 44 番	ニ	1770	1981.10. 7	13	厚中	
97(73m)	第 47 番	ニ	1770	1981.11.17	15	厚中	
95(73n)	第 45 番	ニ	1770	1982. 5.12	21	厚中	
84(73q)	第 11 番	ニ	1770	1981. 6.11	9	京 2	
74	第 10 番	ト	1770	1981. 6.19	10	厚中	
87(74a)		ニ	1770	1981.12.17	16	京 2	「ポントの王ミトリダーテ」序曲
118(74c)		二短	1771	1984. 9.24	49	シンフ	「救われたベトゥーリア」序曲
Anh.216(74g/Anh.C11.03)	第 54 番	変口	1771	1981. 7. 8	11	厚中	偽作
75	第 42 番	ヘ	1771	1982. 3.18	17	京 2	
110(75b)	第 12 番	ト	1771	1982.10. 2	24	京 2	
98(Anh.C11.04)	第 48 番	ヘ	1771	1986.10.30	72	ピロ	
111/120(111a)	第 50 番	ニ	1771	1982.10. 5	25	神中	「アルバのアスカニオ」序曲に終楽章を補作したもの
96(111b)	第 46 番	ニ	1771	1982. 6.18	22	厚中	
112	第 13 番	ヘ	1771	1982. 6.23	23	京 2	
114	第 14 番	イ	1771	1984. 1.20	40	京 2	
124	第 15 番	ト	1772	1983. 1.31	26	京 2	
128	第 16 番	ハ	1772	1983. 4.26	28	労セ	
129	第 17 番	ト	1772	1983. 3.29	27	労セ	
130	第 18 番	ヘ	1772	1984.12.20	51	エンゼ	
132(第 1 版)	第 19 番	変ホ	1772	1984. 3.17	42	エンゼ	
132(第 2 版)	第 19 番	変ホ	1772	1984. 3.14	41	ピロ	
133	第 20 番	ニ	1772	1983. 9.27	34	京 2	
134	第 21 番	イ	1772	1984. 9.15	48	エンゼ	
135		ニ	1772	1983.10. 4	35	毎日	「ルーチョ・シッラ」序曲
161/163(141a)		ニ	1772	1983. 5.27	29	ピロ	「シピオーネの夢」序曲に終楽章を補作したもの
184(161a)	第 26 番	変ホ	1773	1983. 6.21	30	シンフ	「ラナッサ」序曲
199(161b)	第 27 番	ト	1773	1984. 7.14	47	労セ	
162	第 22 番	ハ	1773	1983.10.21	36	ピロ	
181(161b)	第 23 番	ニ	1773	1983.11. 8	37	毎日	

182(173dA)	第 24 番	変口	1773	1983.11.24	38	シンフ	
183(173dB)	第 25 番	ト短	1773	1985.10.25	61	シンフ	
201(186a)	第 29 番	イ	1774	1985. 3.29	53	京 2	
202(186b)	第 30 番	ニ	1774	1985. 1.25	52	ピロ	
203(189b)		ニ	1774	1985. 5.26	54	エンゼ	セレナーデ(第 4 番)K.203 の第 1,6,7,8 楽章
200(189k)	第 28 番	ハ	1774	1985. 6.23	55	ピロ	
196/121(207a)		ニ	1775	1983.7.12	32	京 2	「偽りの女庭師」序曲に終楽章を補作したもの
204(213a)		ニ	1775	1985.10. 4	60	エンゼ	セレナーデ(第 5 番)K.204 の第 1,5,6,7 楽章
208/102(213c)		ハ	1775	1984. 4.27	43	エンゼ	「羊飼いの王様」序曲に終楽章を補作したもの
250(248b)		ニ	1776	1985. 9.12	59	厚中	「ハフナー・セレナーデ」K.250 の第 1,6,5,8 楽章
297(300a)(第 1 版)	第 31 番	ニ	1778	1985.11.14	62	京 2	「パリ交響曲」第 1 版
297(300a)(第 2 版)	第 31 番	ニ	1778	1985.11.24	63	エンゼ	「パリ交響曲」第 2 版
(311a/Anh.C11.05)		変口	1778	1985. 7.16	58	エンゼ	「第 2 パリ交響曲」 / 偽作
318	第 32 番	ト	1779	1984.10.19	50	ピロ	「略奪された村娘」序曲
319	第 33 番	変口	1779	1986. 6. 5	68	エンゼ	
320		ニ	1779	1986. 1.30	64	ピロ	「ポストホルン・セレナーデ」K.320 の第 1,5,7 楽章
338	第 34 番	ハ	1780	1986. 9.27	70	シンフ	
384		ハ	1782	1984. 6.25	45	シンフ	「後宮からの誘拐」序曲
385(第 1 版)	第 35 番	ニ	1782	1984. 4.27	44	エンゼ	「ハフナー交響曲」第 1 版 / 行進曲 K.408- 付き
385(第 2 版)	第 35 番	ニ	1782	1983.11.24	39	シンフ	「ハフナー交響曲」第 2 版
430(424a)		ニ	1783	1986. 2. 5	65	京 2	「だまされた花婿」序曲に終楽章補作(門 良一による)
425	第 36 番	ハ	1783	1986.11.29	74	京 2	「リンツ交響曲」
444(425a/Anh.A53)	第 37 番	ト	1783	1986.10.30	73	ピロ	ミハヤエル・ハイドン作の交響曲に序奏部を補作したもの
504	第 38 番	ニ	1786	1986. 9.27	71	シンフ	「ブラハ交響曲」
543	第 39 番	変ホ	1788	1985. 7.11	57	シンフ	
550(第 1 版)	第 40 番	ト短	1788	1983. 7.12	33	京 2	
550(第 2 版)	第 40 番	ト短	1788	1983. 6.21	31	シンフ	
551	第 41 番	ハ	1788	1984. 6.25	46	シンフ	「ジュピター交響曲」

【注】

・ Anh. = Anhang ドイツ語で「追加」の意。ケツヒェルが後から追加した番号。

・ Anh.A：他人の作品をモーツァルトが写譜したもの。

Anh.C：偽作、または疑わしい作品。

（因みに Anh.B：モーツァルトの作品の他人による編曲）

・ 旧全集：下記 [注1] 参照。

・ 作曲年は推定を含む。

・ 演奏会場の略記

シンフ = ザ・シンフォニーホール

厚中 = 大阪厚生年金会館中ホール

京2 = 京都会館第2ホール

京信 = 京都信用金庫本店ホール

労セ = 大阪労働センター大ホール

エンゼ = 京都子ども文化会館エンゼルハウス

ピロ = 森ノ宮ピロティホール

神中 = 神戸文化中ホール

毎日 = 大阪毎日ホール

【解説】

・ 交響曲全 74 曲の内訳

「旧モーツァルト全集」(注1)によって番号が付けられたもの 41 曲 (第 1 番 ~ 第 41 番)。

同じく旧全集で追加番号が付けられたもの (注2) 9 曲 (第 42 番 ~ 第 48 番、第 54、55 番)

のうち異版のあるもの (注3) 4 曲。

番号が付けられていないもの 4 曲。

オペラまたはオラトリオの序曲で、3つの楽章を持ち交響曲と同等とみなせるもの (終楽章を追加作曲して3楽章形式にしたもの (注4) を含む) 10 曲。

セレナーデからいくつかの楽章をピックアップして交響曲にしたもの 5 曲。

その他 (注5) 1 曲。

注1 19世紀にドイツのブライトコップフ・ウント・ヘルテル社から刊行された最初のモーツァルトの楽譜全集。やはりドイツのベーレンライター社から後に刊行された「新モーツァルト全集」に対して「旧モーツァルト全集」と呼ばれる。

注2 「旧モーツァルト全集」の補巻で追加番号付けのされた初期の交響曲。

注3 第2楽章のみが書き直されたもの(第19番、第31番) 異なる楽器編成に編曲されたもの(第35番、第40番)。

注4 モーツァルトのオペラの序曲には「アレグロ」と「アンダンテ」の2つの部分から成っていて、「アンダンテ」の終わりから切れ目なしにオペラの幕開けに続くものがある。これにモーツァルト自身が終楽章を追加作曲して3楽章の交響曲に仕立てたもの。

注5 K.311a「第2パリ交響曲」は短い序奏の付いた単一楽章の曲である。

・モーツァルトの交響曲の曲数について

モーツァルトの交響曲の数は、最後の「ジュピター交響曲」が「第41番」と通称されているので、一般には41曲とされているが、われわれの「全74曲連続演奏」を別にして下記参考データに見られるように「全曲演奏」や「全曲レコード」と称するものにある曲数は41より多く、且つまちまちである。その理由は以下に述べるように三つある。

18世紀では「交響曲」というジャンルは確立しておらず、序曲やセレナーデなどとの区別があいまいであったこと。 オペラの序曲でありながら3つの楽章を持ち交響曲と何ら異なるところのないもの(ハイドンがメヌエット楽章を定着させ、交響曲の4楽章制を確立する以前の時期では3楽章の交響曲が多かった)として、「ポントの王ミトリダーテ」K.87や「ルーチョ・シッラ」K.135などの序曲がある一方で、逆に「旧全集」で交響曲と認められて番号が付けられた曲の中にも、楽章の切れ目がなくて明らかに序曲とみなされる第26番K.184や第32番K.318などがあり、形式的にはこの両者は全く区別できない。さらに上記注4にあるようにもともと2楽章のオペラの序曲に終楽章を補作して交響曲に仕立て直したものもある。また、セレナーデからモーツァルト自身が楽章をピックアップして交響曲に仕立てたものもあるのである。

作曲されたことがわかっていながら楽譜の存在が不明であったものが、最近になって発見されたこと。 この「全曲連続演奏」の続行中に2曲ものそのような発見があった(1980年:K.19a、1982年:K.16a)。

モーツァルトの作とされたものの中に偽作があったり、いまだに真偽不明のものがあること。 たとえば番号の付いた交響曲のうち、「第3番」はロンドンで知ったアーベルの曲をモーツァルトが写譜したものであり、「第37番」はザルツブルクで同僚であったミヒャエル・ハイドン(有名なヨーゼフ・ハイドンの弟)の交響曲にモーツァルトが序奏を付けただけのものであることが判明している。内容、形式からみて非常に疑わしく、おそらくモーツァルトの作品ではないといわれているものには、「第2番」K.17、「第48番」K.98、発見されたばかりの「オデンセ交響曲」K.16a、「第2パリ交響曲」K.311aなどがある。モーツァルトとその父親レオポルトがそれぞれ同時期に作曲したとされるいわゆる「新・旧ランバツハ交響曲」は、学者の見解や新資料の発見でその帰属が逆転、再逆転したことで知られている。他にも100パーセント真作と言い切れない疑わしい曲が数曲あるようだ。

以上に述べたような事情があるので、モーツァルトの交響曲が何曲かを厳密に決定することは現時点では不可能であり、おそらくこの先もこのままであろう。どこまでを交響曲と認めて勘定するかによってさまざまな「全曲演奏」がありうることになるのである。

われわれの「全曲連続演奏」においては、上記「交響曲全74曲の内訳」で述べたように、3楽章の交響曲形式の序曲や、セレナーデの抜粋による交響曲を含め、また真偽不明の曲や明白な偽作であっても一旦はモーツァルトの作とされたものも加えて、「疑わしきは演奏する」という原則のもとに全74曲とした。曲の数は別としても、単一の演奏団体による「全曲演奏」は日本で初めてのものであろう。

【参考データ】

他者の記録（われわれによる全曲完演時の 1986 年現在）

- ・演奏：1972～74 年 日本モーツァルト協会（東京）例会
52 曲（演奏は東京アカデミカー・アンサンブル、古典音楽協会、東京ゾリステンの分担）
- ・レコード：
 - カール・ベーム / ベルリン・フィル 47 曲
 - ネヴィル・マリナー / アカデミー室内管弦楽団 56 曲
 - シュレーダー、ホグウッド / エンシェント室内管弦楽団 70 曲

・使用楽譜について

連続演奏開始時において、「新モーツァルト全集」は完結しておらず、初期の交響曲の巻は未刊であった。また「新全集」にもとづいたオーケストラ・パート譜もほとんどが未刊であった。入手できるパート譜としては、後期の有名曲がブライトコップフ・ウント・ヘルテル社から、その他がアメリカのカーマス社から発売されていたが、後者の初期の交響曲は粗雑な手書きによるかなりひどいものであった。スコアはそのカーマス社からブライトコップフ・ウント・ヘルテル社によって刊行された「旧全集」のリプリント版がミニチュア・スコアのかたちで刊行されていた。他にイタリアのリコルディ社から全曲のミニチュア・スコアが出版されていて、これは校訂の行き届いた当時としては最も信頼できる楽譜であった。われわれは「新全集」既刊の曲はそれにもとづいて、未刊の曲はこのリコルディ版を参照して上記のパート譜を校訂したものを演奏に用いた。現在では「新全集」にもとづくパート譜が全曲（「新全集」編集当局が認めたもの）について出版されている。「新全集」にも明らかなミスがあり、校訂者の誤った判断もあるので、われわれ独自の判断で修正した部分がある。また「新全集」刊行後の新資料に基づく出版もある（ペーターズ社版による第 36 番《リンツ》）。